**２０１５年京都シンポジウム**

**「いのちのふるさと海と生きる」**

**開催日時：平成27年7月18日（土）13時～17時**

**開催場所：京都大学医学部芝蘭会館 稲盛ホール**

**主　催**

**一般社団法人全国日本学士会・舞根森里海研究所**

**企画の趣旨**

　水は全ての命の根幹の物質です。

日本は世界で最も安全でおいしい飲料水に恵まれた類まれな国と言えます。海に生まれた命が陸上に進出しても生きていけるのは海と陸（森）の間の水循環のおかげです。

海から離れた京都に暮らす私たちの命の源も海にあることを、そして、その海が著しく疲弊しつつある現実を、海の日にちなんで一度ゆっくり見据えてみませんか。続く世代のために。

　時間と空間を通じて遠く離れた世界と不可分に結び付いている“つながりの世界”を、日本の学術・文化の中心地、京都において育まれた新たな学問「環境考古学」、「森里海連環学」、「自然資本経営論」などの視点より、“命のふるさと海と生きる”今日的意義を考える京都シンポジュウムに是非ご参加ください。

なお、本シンポジウムは、東日本大震災２年後の現状を知るシンポジウム「東日本大震災後の復興の今を語る」（2013年）、海から未来を見据えるシンポジウム「海遍路・東北－海から自然と文化を考える」（2014年）に続く一連のものとして、宮城県東北気仙沼市の舞根森里海研究所と一般社団法人全国日本学士会共催により開催いたします。

平成２７年７月１８日

２０１５年京都シンポジウム「いのちのふるさと海と生きる」実行委員会

委員長　田中　克：舞根森里海研究所所長・京都大学名誉教授

事務局　岡田和男：一般社団法人全国日本学士会専務理事・事務局長

**一般社団法人全国日本学士会・舞根森里海研究所共催**

**２０１５年京都シンポジウム**

**「いのちのふるさと海と生きる」**

**プログラム**

**開催日時：平成２７年７月１８日（土）１３時～１７時（受付：１２時３０分～）**

**開催場所：京都大学医学部 芝蘭会館 稲盛ホール**

**（京都市左京区吉田近衛町　京都大学医学部構内）**

**Ⅰ　趣旨説明**（13時～13時15分）

**「いのちのふるさと海と生きる」**

京都大学名誉教授・舞根森里海研究所所長　　　**田　中　　　克**

**Ⅱ　講　　演**（13時15分～16時45分）

**講演１：海と命「人類の遠い祖先を海に訪ねて」**（13時15分～14時）

琉球大学理事（副学長）・東京大学名誉教授　　　**西　田　　　睦**

**講演２：海と森「森と海を結ぶ新たな研究と教育に挑む」**（14時～14時45分）

京都大学フィールド科学教育研究センター教授　　　**山　下　　　洋**

（休憩：１４時４５分～１５時）

**講演３：海と文明「環太平洋文明から日本の未来を見据える」**（15時～15時45分）

ふじのくに地球環境史ミュージアム館長

　　国際日本文化研究センター名誉教授　　　**安　田　喜　憲**

**講演４：海と経済「自然資本経済、日本モデルが世界を救う」**（13時45分～16時30分）

京都大学大学院経済学研究科特任教授

環境ジャーナリスト　　　**谷　口　正　次**

**Ⅲ　フロアーとの対話（質疑応答）**　16時30分～17時00分

**参加自由**（当日も受け付けますが、準備の都合上、出来る限り事前にご連絡願います。）

**懇 親 会**：１８時～２０時　於：京都大学楽友会館

　　　　　シンポジウム終了後、講演者を交えた懇親会を催します。会費は2,000円です。

**問合せ先**：一般社団法人　全国日本学士会事務局

Tel：075(724)6500　Fax：075(722)3002　e-mail：gakusi@poppy.ocn.ne.jp

**講演者プロフィール・講演要旨**

**西　田　　　睦　氏**

**琉球大学理事・副学長**

**東京大学名誉教授**

**【プロフィール】**

1947年、京都市生まれ。京都大学農学部卒、同大学院博士課程単位取得。アユの種内変異に関する研究で農学博士。琉球大学理学部助手、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員、福井県立大学生物資源学部助教授、東京大学海洋研究所教授、東京大学大気海洋研究所長等を経て、現在、琉球大学理事・副学長、京都大学特任教授、東京大学名誉教授。

分子集団遺伝学的解析および分子系統学的解析を通じて、水圏生物、特に魚類の多様性進化の研究をおこなってきた。主な受賞に、生態学琵琶湖賞（1998年）、日本水産学会進歩賞（1999年）、日本進化学会賞（2010年）、木村資生記念学術賞（2010年）などがある。

主な著書には以下のようなものがある。「タンガニイカ湖の魚たちーその多様性の謎を探るー」（平凡社，共著, 1993）、Biology of Biodiversity（Springer，共著, 1999）、「魚類の自然史－水中の進化学」（北海道大学出版会，共著, 1999）「琉球列島の陸水生物」（東海大学出版会，共編著, 2003）、「生態系へのまなざし」（東京大学出版会、共著, 2005）、「生と死の自然史：進化を統べる酸素」（東海大学出版会、監訳, 2006）、「保全遺伝学入門」（文一総合出版、監訳, 2007）、「生物系統地理学」（東京大学出版会、共監訳, 2008）、「海洋の生命史」（東海大学出版会、編著, 2009）、「ダーウィンフィッシュ」（東海大学出版会，共訳, 2012）など。

**【講演１：海と命「人類の遠い祖先を海に訪ねて」要旨】**

海は広く大きい。地球表面積の7割を占める。海が擁する水とその循環は、地球の気候を支配している。海は水産生物を生み出す場としても人類のいのちを支えている。また、海運の場、レジャーの場等々としての価値も計り知れない。しかし何よりも大事なことは、海はヒトを含むあらゆる生物の祖先が生じた場、すなわち生命の起源の地であり、一部の生物が陸に上がるまでの長い時間、生命が進化してきた場であるということである。

本話題提供ではこの点に焦点を当て、いのちと海とのつながりを、進化という視点から考えてみたい。生物としてのヒトと海とのつながりを、進化学的・系統学的に見ると、ヒトは陸に上がった魚と言ってよいということが分かる。それはどういうことなのか。海における「魚」の進化について、具体的な研究例にもとづいてお話しする。そして、今は陸上を生活の場としているヒトは、意識的に海とつき合う必要があること、そしてそれを通じてしっかりと「海を知り、守り、活用する」ことが大切であるということを、ともに確認したい。

**山　下　　　洋　氏**

**京都大学フィールド科学教育研究センター教授**

**【プロフィール】**

1954年生まれ。専門分野は沿岸資源生態学、森里海連環学。

1983年　東京大学農学系研究科博士課程修了。東京大学海洋研究所助手を経て1989年から水産庁東北区水産研究所主任研究員、研究室長。2002年から京都大学農学研究科舞鶴水産実験所、2003年より同フィールド科学教育研究センターで教育と研究に従事。大学院農学研究科（里海生態保全学分野）と大学院地球環境学舎（水域生物環境論分野）に所属する2研究室を担当して大学院生とともに研究を行っている。学際融合教育研究センター 森里海連環学教育ユニット長を兼任。

　著書に「森里海連環学」（監修　京都大学学術出版会）、「Connectivity of Hills, Humans and Oceans」（共編　京都大学学術出版会）、「ヒラメ・カレイのおもてとうら」（恒星社厚生閣）など。

**【講演２：海と森「森と海を結ぶ新たな研究と教育に挑む」要旨】**

**「森は海の恋人」を科学する**

　京大フィールド科学教育研究センターでは、2003年に当センターが発足して以来、「森里海連環学」を教育研究の柱として、森林、人の住む里、沿岸海域の生態系が主に河川を通してつながっている機構と、その連環が人間活動により分断されている現状や分断の影響について研究してきた。この研究は、当センターの社会連携教授である畠山重篤氏が提唱する「森は海の恋人」を科学的に解明しようとする研究ということもできる。

本研究のフィールドとして最も力を注いできたのが、源流を当センター芦生研究林に発し、河口近くには同舞鶴水産実験所がある由良川とその流域である。森からの栄養塩や腐植酸鉄の供給を明らかにするために、GISにより支流流域ごとの土地利用を把握し、支流単位で流域利用と河川が輸送する栄養物質濃度との関係を調べた。しかし、残念ながら窒素や燐などの栄養塩だけでなく、溶存鉄や腐食物質についても、森が特異的に生産し川や海に供給しているという証拠をつかむことはできなかった。さらに、由良川が注ぐ丹後海の植物プランクトン生産においても、溶存鉄はそれほど重要ではないという結果が得られた。

それでは、森への海の思いは片思いなのか。決してそうではない。鉄と栄養塩については、異なる海域や気候帯など多様な地域で調べる必要がある。また、由良川では、スズキの稚魚が河口から約50 kmも上流の淡水域まで遡上し、河川を成育場としていることがわかった。スズキが主食とするアミ類は、明らかに陸域由来の栄養で生産されている。耳石微量成分分析という手法を用いて、丹後海で漁獲されるスズキ成魚の約35％が由良川を稚魚期の成育場としていることが明らかになった。

**世界農業遺産国東半島・宇佐地域でのクヌギ林と川や海との関係**

現在、大分県国東半島においても、森里海連環学に関する集中的な調査と研究を進めている。国東半島は、広大なクヌギ林及び河川につながるため池群と農林水産業との自然循環が評価され、2013年に世界農業遺産に認定された。私たちは、2014年度から広いクヌギ林を流域に持つ河川とそうではない河川間で、生物生産力と生物多様性について比較研究を開始した。まだ研究は始まったばかりであるが、これまでに得られたデータからは、クヌギ林を流れる河川の方が栄養塩濃度が高く、生物多様性と生物生産力がともに高い結果が出つつある。今後はそのメカニズムの解明に焦点を当てる予定である。

**森里海連環学教育**

2013年4月から、京都大学と（公財）日本財団との共同事業として、京大学際融合教育研究センターに森里海連環学教育ユニットを組織し、京都大学全学の大学院生を対象に森里海連環学を教育する、「森里海連環学教育プログラム」をスタートした。このプログラムの目的は、各専門分野において深く掘り下げる研究を行っている京大の大学院生に対して、森から海までという広い視野と文理融合の観点から、人と自然の共生や人類の持続的な発展を考え、政策立案などに活かすことができる大学院生を育成することである。これまで3年間の受講生は、9研究科180名であり、2年間で49名がプログラムを修了した。また、48名の受講生が、森里海連環学を基盤とした国際インターンシップに出かけ、20カ国を超える国々で貴重な経験をしてきた。今後本プログラム修了生が世界を舞台に活躍してくれることを期待している。

**安　田　喜　憲　氏**

**ふじのくに地球環境史ミュージアム館長**

**国際日本文化研究センター名誉教授**

**【プロフィール】**

東北大学大学院修了　理学博士

環境考古学者／前東北大学大学院環境科学研究科教授、京セラ株式会社監査役、立命館大学環太平洋文明研究センター長、ふじのくに地球環境史ミュージアム館長、国際日本文化研究センター名誉教授　スウエーデン王立科学アカデミー会員

紫綬褒章受章、中日文化賞、東海テレビ文化賞、中山賞大賞など受賞

著書：安田喜憲：『一万年前』（単著）　　　　　　　　　（イーストプレス　2014年）

安田喜憲：『ミルクを飲まない文明』（単著）　　　（洋泉社歴史新書　2015年）

　　　安田喜憲：『日本神話と長江文明』（単著）　　　　（雄山閣　　　　　2015年）

**【講演３：海と文明「環太平洋文明から日本の未来を見据える」要旨】**

自然の資源を一方的に搾取し、森を砂漠に変える動物文明の代表は畑作牧畜民である。欧米文明はこの世界観に立脚している。それは一見、生産性が高く文明を発展させるように見えるが、実はその文明は地球の資源を貪り食う文明の繁栄なのである。地球の資源を搾取し、地球を砂漠に変えた後は、宇宙に出かけようとする。それがこの動物文明のライフスタイルなのである。

これに対し地球上の生きとし生けるものとともに、千年も万年もこの地球で生き続ることに最大の価値をおいたのが植物文明である。稲作漁撈民がその代表である。

もし人類が持続可能な文明を希求するのであれば、動物文明のライフスタイルを植物文明のライフスタイルに転換することが必要なのである。

そのためには命の水の循環系を確保し、過去に感謝し未来に責任を持って生きなければならないのである。生きとし生けるものとともにいき続けることが必要なのである。人を信じ自然を信じ未来を信じて生きなければならないのである。

それができるかどうか。今、皆様に突きつけられているのである。

植物文明の伝統を保持しているのは稲作漁撈民だけではない。環太平洋にはかって植物文明の仲間たちが暮らしていた。それが１５世紀以降、スペイン人やポルトガル人さらにはアングロサクソン人たちの動物文明に侵略され、歴史の陰に追いやられているだけなのである。マヤ文明やアンデス文明を支えたインデイヘナの人々さらにはマオリの人々のライフスタイルには、今も植物文明の片鱗が残されている。我々稲作漁撈民は、こうした環太平洋の植物文明の伝統を維持する人々と協力して、動物文明の力で荒廃した地球をよみがえらせ、生きとし生けるものの命が輝く生命文明の時代を創造することに、今こそ立ち上がらなければならないのである。

**谷　口　正　次　氏**

**京都大学大学院経済学研究科特任教授**

**環境ジャーナリスト**

**【プロフィール】**

1938年生まれ。60年九州工業大学鉱山工学科卒業、小野田セメント株式会社入社。資源事業部長、常務取締役、合併により太平洋セメント株式会社専務取締役、屋久島電工株式会社代表取締役社長、国連大学ゼロエミッション・フォーラム産業界代表理事等を歴任。現在、資源・環境ジャーナリスト、京都大学大学院経済学研究科特任教授。他にNPO法人ものつくり生命文明機構副理事長。主著は「メタル・ウオーズ」（東洋経済新報社2008度日経BP・BizTech図書賞受賞）、「自然資本経営のすすめ」（東洋経済新報社2014年）ほか。

**【講演４：海と経済「自然資本経済、日本モデルが世界を救う」要旨】**

　わが国は海に背を向けては生きられない世界第3位の経済大国である。食糧を含む総資源投入量の約50％を海外からの輸入している。金額にすると約80％となる。世界一の海外依存度である。ということは、世界の数多くの国々の資源に国際貿易というかたちで依存しているだけではなく、輸出国の土地、水、森林、土壌、生物多様性、生態系といった自然資本に大きく依存していることを意味する。海に背を向けては生きられない国である。

20世紀高度経済成長によって日本が得た物質的な豊かさを手にするために、国内のみならず世界の自然資本の大きな恩恵を受けてきたわけである。しかし、その代償として日本を含むグローバルな自然資本は減耗・劣化が進んでいる。

日本のフード・マイレージとバーチャル・ウオーターは世界一。本シンポジウムの企画趣旨にあるように；“時と空間を通じて遠く離れた世界と不可分に結びついている”のである。

未だ豊かな生物多様性を残し（世界のホットスポット）、文化と歴史と伝統が生きているわが国としては、世界第6位の広さの排他的経済水域の資源を含む自然資本に恵まれた国として、これを賢く経営して自然資本経済（Natural Capital Economy）を築き、資源の海外依存度を減らし持続可能な社会をつくり日本モデルとして発信したい。

そのためには；＊国際的・国内的地産地消推進（市場原理主義からの脱却）＊資源生産性の根本的向上（資源消費税導入）＊持続可能な消費（価値観の転換）＊東京一極集中から分散型社会構築＊海洋産業創生＊あらゆる自然資本を繋げる、といったパラダイムの転換が求められる。

**趣旨説明・司会者の紹介**

**田　中　　　克　氏**

**京都大学名誉教授**

**舞根森里海研究所所長**

1943年滋賀県大津市生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。水産庁西

海区水産研究所研究員、京都大学農学部助教授経て、同大学院農学研究科教授。2003年京都大学フィールド科学教育研究センター長。2007年マレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所客員教授。2010年より（財）国際高等研究所チーフリサーチフェロー。

この間、水産生物学、特に沿岸性魚類の初期生態を研究し、それを基盤にして森から海まで

の多様なつながりとその再生を目的とする新たな統合学問「森里海連環学」を2003年に提唱。国民的社会運動「森は海の恋人」と連携し、日本の沿岸環境再生の試金石である有明海における森里海連環研究ならびに気仙沼舞根湾における3/11巨大地震と津波が沿岸生態系に及ぼした影響と回復過程に関する研究を進める。

現在、舞根森里海研究所所長、NPO法人森は海の恋人理事、NPO法人ものづくり生命文明機構理事

主な著書：魚類学下（1998年、共著）、森里海連環学（2007年、共著）、森里海連環学への

道（2008年）、稚魚－生残と変態の生理生態学（2009年、編集）、水産の21世紀－海から拓く食料自給（2010年、編集）、森と海を結ぶ川（2012年、共著）など

2015年　女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」東京シンポジュウム

開催のご案内

「企画の趣旨」

海は私達のいのちの究極のふるさとです。東日本大震災は甚大な被害と引き換えに、「いのち」のありようを根元的に見つめ直す機会となりました。20世紀後半に、日本は著しい経済成長を成し遂げた半面、この間、いのちの源である水を循環させる海へ理不尽な負担をかけ続け、「いのち」に関わる多くの大切なものを失くしてきました。なかでも、命がわき出る“宝の海”であった有明海を、司法も巻き込み混迷するばかりの“瀕死の海”に至らしめ、日本周辺から海辺で元気に遊び学ぶ子どもたちの姿を消し去ってしまいました。

　東日本大震災が私たちにもたらした最も深刻な悲劇は、多くの人々から“ふるさと”を強制的に奪い去ったことであり、その大部分は「人災」と呼ぶべき悲劇であった点です。時代は、お金と物で動き、こころや環境（自然）を壊し続け、それらの負債を“断りなく”続く世代に丸投げしかねない無責任な「物質文明」社会を根本的に見直し、すべての“いのち”が大切にされる「環境・生命文明」社会へと踏み出せるかが大きく問われています。

　硬直化した縦割りの組織と思考に縛られた社会を、より柔軟で多様性にあふれた本来の人間らしい社会に戻すには、母性の感性、知性、楽天性、行動力が不可欠と思われます。「いのちのふるさと海と生きる」をメインテーマに、7月18日に実施しました京都シンポジュウムの趣旨を引き継ぎ、いのちの巡りにより深く関わり、感性豊かな女性の皆さんが描く東京シンポジュウムを開催いたします。いのちの多様性を考える東京シンポジュウムに是非ご参加いただき、共に生きる未来への道を考えたいと思います。

日　時 ： 2015年9月27日（日）　13時30分～17時

場　所 ：　東京大学農学部フードサイエンス棟１階中島ホール

プログラム

13時30分～13時45分　企画の趣旨　田中　克（舞根森里海研究所長・京都大学名誉教授）

13時45分～14時15分　三陸漁師の心意気－赤浜ロックンロール　小西晴子（映画監督）

14時15分～14時45分　ふるさと－国を越えた思いを探る　白戸智子（東京経済大学講師）

14時45分～15時15分　身体と社会の“幹”を鍛える　跡見順子（東京農工大学教授）

15時15分～15時30分　（休憩）

15時30分～16時00分「森里川海プロジェクト」が時代を変える

＊山本麻衣（環境省自然環境局自然計画課）

16時00分～16時30分　森の採譜－森と虫の賛歌　丹治冨美子（詩人・作家）

16時30分～17時00分　フロアーとの意見交換

　（＊異動等により演者が変更になる場合があります）

「主催」

一般社団法人全国日本学士会・舞根森里海研究所

**【メ　モ】**

**アンケートのお願い**

本日は、2015年京都シンポジウム「いのちのふるさと海と生きる」にご参加いただきありがとうございました。

本会におきましては、本シンポジウムの内容を、本会会誌アカデミア№153　2015.10に掲載し、広く配布いたしたいと考えております。

また、本日のシンポジウムに参加された皆様方のご感想、ご意見等も合わせて掲載させていただきたく、つきましては、裏面にご自由にご記入いただければと存じます。

なお、会誌への掲載を望まれない方は、その旨記載願います。

おって、会誌をご希望の方は、お送り先をご記入いただければ、無料にてお送りいたします。

**ア　ン　ケ　ー　ト**

会誌の送付を、□希望する。　□希望しない。

　　お送り先　住所：〒

　　　　　　　宛名：

よろしければ、ご記入願います。

性　別：　□女性　　　　□男性

年　齢：　□２０歳代　　　□３０歳代　　　□４０歳代　　　□５０歳代　　　□６０歳代

　　　□７０歳以上

ご住所：　□京都市府内　　□近畿圏内（　　　　　　　）　　□その他（　　　　　　　　）

本シンポジウムの開催を何でお知りになりましたか

　□チラシ　　　□知人　　　□新聞　　　□HP　　　□その他（　　　　　　　　　　）

|  |
| --- |
| ○本日のシンポジウムの感想、意見、参加された動機等をご自由にお書き下さい。（□　感想等の本会会誌への掲載を望まれない方は、□内にチェックを入れてください。） |

※ご協力ありがとうございました。

**質　問　・　意　見**

**各講演へのご質問、ご意見等がございましたら、下記にご記入の上、フロワーとの対話（質疑応答）の前までに、会場内に設置の「質問箱」へ投函願います。**

|  |
| --- |
|  |